

2007年夏休み友情のレポーター カンボジア取材

「カンボジア」 高木 慶貴（静岡県 / 当時 14 歳）

2007年（平成19年）5月20日（日曜日） 朝日新聞 掲載記事

「夏休み友情のレポーター」募集

NPO 法人「国境なき子どもたち」(KnK) が今夏、カンボジアで恵まれない子どもたちの様子取材する11～18歳の子どもを募集している。7月28日～8月10日、現地で生活状況など取材し、帰国後はその結果を発表会などで報告する。

6月15日必着で、「最近気になった海外のテレビニュースや新聞記事とその理由」をテーマにした作文などを送って応募する。募集は若干名で参加費は5万円。詳しい応募方法はKnK(03-6279-1126)まで。

母が発見！！

僕に何ができるか分かりませんが挑戦しようと思いました。

2007年（平成19年）7月20日（金曜日） 静岡新聞 掲載記事

NPO『友情のレポーター』選出

高木君（沼津・片浜中）意気込む

来月 カンボジアの現状直視

アジア七カ国の路上生活を送る青少年を支援している東京のNPO法人「国境なき子どもたち」が募集する「友情のレポーター」に、沼津片浜中学校三年の高木慶貴君が選ばれた。八月十八日 - 二十八日の日程でカンボジアを訪れ、現地の子どもの現状を取材する。

これまでも中越地震などの被災地でボランティア活動に取り組んできた高木君は「ニュースで見聞きする現場を自分の目で見たい」と応募。作文の選考を経て、三十九人の中から選ばれた。

カンボジアでは、同法人が運営する自立支援施設を訪問し、絹織物の職業訓練の様子をビデオカメラで取材するほか、現地の子どもたちとも交流する。帰国後は一本のビデオにまとめて報告するという。

高木君は「現地へ行くのは楽しみ。しっかりとリポートしてきたい」と意気込んでいる。

「友情のレポーター」は平成七年に始まり、これまでに四十二人が派遣されている。

静岡新聞の取材がありました。

とても緊張しました。

緊張しすぎて話したことほとんど覚えていません。

初めて KnK のスタッフと会いました。ドキドキしました。

カンボジア取材行程表

第一日目 8月18日(土) 成田発、ソウル経由で22:00 プノンペンに到着、ホテルへ移動

第二日目 8月19日(日) マーケットなどを中心にプノンペン市内見学

第三日目 8月20日(月) 絹織物の島、コッダイを見学

第四日目 8月21日(火) 飛行機にてプノンペンからシエムリアップに移動、アンコールワット遺跡群見学

第五日目 8月22日(水) アンコールワット遺跡群見学

第六日目 8月23日(木) 車でシエムリアップからプノンスロックを經由し、シルク生産の村を見学後、

バタンバンへ移動

第七日目 8月24日(金) シルクワークショップ取材

第八日目 8月25日(土) シルクワークショップ取材

第九日目 8月26日(日) 若者の家の子どもたち、卒業生、スタッフとミーティング、

レポーターによる日本の紹介、車でバタンバンからプノンペンへ移動

第十日目 8月27日(月) プノンペン市内見学、23時飛行機にてプノンペン出発

第十一日目 8月28日(火) ソウルを經由で11:30 成田に到着

2007年8月18日(土)

メンバー紹介

レポーター 大沼さん

事務局長 ドミニクさん

スタッフ 清水さん

スタッフ 足立さん

レポーター 高木

いよいよ！！

日本から出国。緊張と楽しみで心の中がいっぱいです。

2007年8月19日(日)

首都プノンペンの町には、ストリートチルドレンが多くいました。

トゥクトゥクに乗っています。風が気持ちがいいです。

僕より幼い子どもたちが、「お金が欲しい」と言ってきたり「水」や「本」を売っていました。僕はこのような子どもたちを見て見ぬ振りをするのが、とてもつらかった。

写真：王宮前にて

8月20日(月)

これはシルクを織っているところです。一本一本手作りで織っているので大変だと思います。

これはシルクに使う糸を巻いています。驚いたことに「自転車」を「リサイクル」しています。

この少年はシルクに使う糸を巻く仕事をしています。なぜこの「少年」は「仕事」をしているか。

8月21日(火)、8月22日(水)

カンボジアの歴史

12世紀前半、アンコール王朝のスーリヤヴァルマン2世によってヒンドゥー教寺院として三十余の歳月を費やし、建立される。内戦が収まりつつある1992年にはアンコール遺跡として世界遺産に登録され、1993年にはこの寺院の祇堂を描いたカンボジア国旗が制定された。

アンコールワット遺跡にて、現地の方と仲良くなって写真を撮影。

900年前にこんな大きな建物を建てるなんてとても驚きました。

どうやって建てたのでしょうか？

8月23日(木)

シルクの作り方

たまご 幼虫(餌はくわの葉) さなぎ 繭(シルクの方法)

繭から糸を採った後の幼虫は食べます。ピーナッツ味？僕も食べました。

ゆでる(灰が目に入って痛かった。)

染色（ココナッツを使って色を染めるなんて驚きました。）自然染料、化学染料

8月24日（金）

若者の家

Q．どんな人がいるの？

A．戦争で家をなくしたり、地雷で両親をなくし、施設にいたが15歳（僕の年）になったため施設を出された人など。

Q．どんな職業訓練をしているの？

A．男の人・・・バイク修理、自動車修理など
女の人・・・シルク関係

本当はとてもつらいはずなのに、みんな「とても明るく」びっくりしました。
みんなとやったバレーボールとても楽しかったです。

姉からプレゼントされた本「旅の指さし会話帳 カンボジア」、とても役立ちました。

「カンボジア」

僕は、カンボジアに行き驚きの連続でした。

まず、空港に降りてカンボジアの蒸し暑さに驚きました。また、屋台が多く、バイクは、2人乗りや3人乗り、6人乗りまであった。また、バイクは免許がいらないと聞き、またまたビックリしました。

裏路地では、夜とても暗く驚きました。僕よりも小さな子どもが僕に

「お金をちょうだい。」「本を買って。」

と言われました。僕は、信じられませんでした。日本では考えられません。

僕はカンボジアについて8日目の朝、その時に近くにいたストリートチルドレンの子にパンをあげました。僕はその子の笑った顔が、未だに忘れられません。僕は、カンボジアに着いてからずっとストリートチルドレンを、見て見ぬ振りをしていることに、とても心が痛くて何もできない自分が、とても嫌でたまらなかった。でも、パンをあげたことで少し気持ちが楽になったが・・・。でも心の底には、何か暗く重いものが残っています。もうすぐ、日本に帰ってきて一週間。レポートをまとめていると楽しかったこともたくさんありましたが、何かがいらいらしてきます。僕はこんなに、のんびりとしていていいのだろうか？？何かできないのだろうか？？でも楽しかった

たこともたくさんありました。

若者の家では、僕と同じ年ぐらいの人や少し年上の人が学校に行けずに職業訓練をしたりしていましたが、みんなとても明るく、僕は、英語が分からないので

「日本語を教えて」

と言われて教えるとすぐに覚えてくれて、逆にカンボジア語を教えてもらったり、ジェスチャーで話したり、とても楽しい時間を過ごしました。本当に楽しかったです。

今回カンボジアに行って心の痛いこともありましたが、言葉は通じなくても心と心は必ず通じ合う。と僕は信じています。

僕に何ができるのか??分かりません。僕はこれからの人生の中で僕にしかできないことを見つけます。

絶対!!絶対!!

2007年 夏休み友情のレポーター 高木 慶貴

2007年夏休み友情のレポーター カンボジア取材

「仲間」 大沼 文香（山形県 / 当時 15 歳）

カンボジア取材行程表

- 8/18 飛行機でカンボジアへ（ソウル経由）
- 8/19 観光（国立博物館・王宮）
- 8/20 プリンス・シソワットさんにインタビュー
コッダイ見学
- 8/21 飛行機でシエムリアップへ
アンコールワット遺跡群見学
- 8/22 アンコールワット遺跡群見学
- 8/23 プノンスロック取材
車でバタンバンへ
- 8/24 シルクワークショップ取材
- 8/25 若者の家取材
2人の家を訪問
皆でパーティー
- 8/26 日本の紹介
若者の家の子どもたちと交流
車でプノンペンへ
- 8/27 ロシアンマーケットでショッピング
- 8/28 飛行機で日本へ（ソウル経由）

カンボジアシルク～コッダイ、プノンスロック～

「カンボジアにとってシルクとはどういうものですか。」インタビューの時にプリン스에聞いた。「百年も前からずっとやってみんなが知っているものです。」という答えが返ってきた。

コッダイは絹織物の島だ。首都、プノンペンの川の中洲にある島だ。この島の人々は絹織物で政経を立てている。家には必ずと言っていいほどはた織機があった。家は高床式になっていた。本土とは雰囲気全然違って、とてもおだやかだった。

コッダイでシルクワークショップをしているところがあり、見学させてもらった。一番驚いたのがはた織機のことだ。伝統的なものは早く織ることはできないが、一台

百ドルくらいで買うことができる。また、柄もつけられる。自動の近代的なものは早く織ることはできるが、一台二百ドルくらいと高い。それに柄がつけられない。なぜかというと、伝統的なものよりも小さいからだそうだ。

プノンスロックはシルクを一から生産している地域だ。くわの木を育てる村、蚕を育てる村などに分かれている。ここの地域は昔農業をしていたが、貧しかった。それを知った王族の親せきであるプリンス・シソワットさんがクメールシルクヴィラージュという団体をつくり、支援を始めた。プノンスロックの人たちの収入は政府を通さず得られている。プリンスは「シルクのような美しいもの伝統的なもので貧困を救えるのはすばらしいことだ」と思ったらしい。

プノンスロックでは驚きの連続だった。糸をつくり終わった蚕をゆでて、揚げて、それを食べていたのだ。食べないかと聞かれたが、蚕が嫌いな私は無理だった。死んだ蚕さえも無駄にしないのはすごいと思った。また糸の染め方もいろんな材料を使っていた。プノンスロックでは自然のものしか使わない。ヤシの実、鉄、虫、色をおとすして白くしたりもする。

二つの、シルクで生計を立てている場所を訪れた。収入は得ているとしても貧しい暮らしのようだった。貧しい生活なのだろうけど、プノンペンなどで貧しい生活を送っている人たちより、苦しい感じはなかった。それは伝統産業を行い、昔ながらの生活を送っているからだろうか。

プノンスロックの糸を染めるところで悲しい話を聞いた。昔は自然のもので青色をだすことができたらしい。しかし今はできない。なぜなら、戦争で一度シルクの文化がすたれたからだ。青色の出し方を知っている人もいなくなってしまった。戦争はこんなところにまで影響をおよぼしている。

カンボジアの伝統であるシルク。これで貧困から救えるならすばらしいことだと思う。シルク生産がもっと盛んになればカンボジアシルクを知る人も増えるし、何より生活が豊かになる。

写真：まゆから糸をとる作業をさせてもらった。プノンスロックで。

写真：伝統的なはた織機。コッダイで。

アンコールワット遺跡群

二日間、チャンテリアとソピアップと一緒にアンコールワット遺跡群の見学をした。一日目はアンコールワットに行き、二日目はタ・プロームとバイヨンとバコンに行った。

歴史や遺跡などが好きな私はとても楽しかった。石をほってつくられた遺跡というのは日本では見れないと思う。これにここまで宗教を重んじている遺跡も。遺跡の大

きさと数の多さには本当に驚いた。

でも、やはりここでも「戦争」というものを、感じた。遺跡の中にある神々の像。その像の首から上がない。戦争で壊されたのだと聞いた。多分頭は一番神聖なところ。人類が歴史の中でつくり、今なお残り、人々に感動を与えるものの影も見ることができた。

また、遺跡の入口などで地雷被害者が楽器の演奏をしていた。これも日本では絶対に見ない光景だ。戦争は今も人々を苦しめているということがよくわかった。

写真：タ・プロームで。

写真：バイヨンで。

写真：慶貴、チャンテリィア、ソピアップと。アンコールワットで。

若者の家

「若者の家」それは KnK が運営する、元ストリートチルドレンや人身売買の被害にあった青少年を受け入れている自立支援施設だ。受け入れる時の年齢が十五歳から十九歳の子どもを受け入れている。だから、私達と同じくらいの年代の人たちと話しをすることができた。

私たちが訪れたのはカンボジアで田舎の方にあるバタンバンの若者の家だ。静かなところで思ったよりも敷地が広がった。

今シルクワークショップに参加していて一緒にアンコールワットに行った十八歳の女の子チャンテリィア。彼女に若者の家を説明してもらった。女子の部屋がある建物と男子の部屋がある建物と昨年からはまったシルクワークショップの建物と三つに分かれていた。彼女の部屋にも連れて行ってもらった。二人部屋だと教えてくれた。机が一つあった。一日一時間勉強するそうだ。学校に行つてそうじをして洗濯もして・・・それでもしっかり勉強している。

チャンテリィアは両親に暴力をふるわれ、KnK とは別の団体のところにいた。十五歳の時に若者の家に来た。両親は亡くなってしまい、六人兄弟もバラバラになってしまった。そんなチャンテリィアだが、いつも笑顔で学校に通い、シルクワークショップにも参加して頑張っている。

もう一人一緒にアンコールワットに行った二十歳のソピアップ。彼女はシルクワークショップに参加している。私たちは彼女の家に訪問させていただきインタビューした。家に着いたとき一瞬唖然としてしまった。ここが家なのかと。屋根はトタンで一階に壁はない。一階は床が地面だ。木で作られた低くて広い台のようなものにござがひいてあり、あとは台所のようなものがあった。2階はとてもせまく、床がぬけそうでした。ちょっとこわかった。

ソピアップは小学六年生まで学校に通ったが、もう学校に行かなくていいとお父さんが言い、行ってない。三人姉妹で末っ子。お父さんはお酒をたくさん飲み、働いていないと言う。彼女に「お父さんに働いてほしいですか。」と聞いてみた。笑顔で「はい。」という答えが返ってきた。この時私はソピアップもチャンテリィアも現実をしっかりと受け止めているんだなぁと思った。そうでなければこんなにも笑顔で今を生きていられるわけがない。彼女たちは日本の若者たちよりもずっとずっと輝いて私には見えた。

若者の家のみんなは本当にストリートチルドレンだったりしたのだろうか。みんな本当に明るかった。つらい過去があるようには見えなかった。そう見えたのはみんなが現実をしっかりと受け止めているからだろう。そしてつらい過去を捨て去り、今を一生懸命生きているからだろう。みんなは日本の私達よりも強く優しい心を持っている。それは一緒にいてよくわかった。たとえ数分でも。それともっと勉強したいという強い気持ちに驚かされた。自分の恵まれた環境が痛いほどわかった。これからは若者の家のみんなに負けないくらい一生懸命勉強したい。この環境に感謝しながら。日本の人に知ってほしい。若者の家のみんなの頑張りを。強さを。優しさを。

写真はプノンペンで本を売っていた少年。道を歩いていると物乞いをする子や新聞を売る子、靴みがきをする子などたくさん見た。

初めて物乞いされた時、どうしていいかわからなくなった。今お金をあげたとして、彼らはこの生活からぬけ出せるのだろうか。でも今お金をあげなかったら彼らは生きていけるのだろうか。

私が何回かお金をあげた子がいた。その男の子は手足が半分くらいまでしかなく、車いすに乗っていた。十六歳だと言っていた。たぶん枯葉剤などが原因だろうとスタッフの方から聞いた。私が思うに車いすを押していたのはその子の弟だろう。

私が今回、唯一食べ物をあげた女の子がいた。彼女は十四歳で赤ちゃんを抱えていた。年の離れた妹、弟だろうか。もしかしたら彼女の子どもかもしれない。

子どもだけではなかった。赤ちゃんを抱えているお父さんやお母さん。年をとったおじいさんやおばあさんも物乞いをしていた。次世代へと引き継がれてしまっているようだ。

私の迷っている心を少しだけ明るくしてくれたものがあった。それはお金や食べ物をあげた時に見せてくれた笑顔だ。また、食べ物をあげた女の子が私のことを覚えてくれて次の日、手をふってくれたことは本当に嬉しかった。次の世代に苦しい思いをする子がいなくなるように今断ち切らなくてはならない。

生きるために・・・

あとがき

私はカンボジアの現状を見てそれに対して自分は何ができるのかを見つけるためにカンボジアに行った。でもその答えは見つけることができなかった。解決策などわからない。だけど、一つだけ学んだことがあった。それはみんな同じ地球に生まれた仲間だということ。若者の家の子どもたち、物乞いする子、托鉢にまわるお坊さん、足がない人・・・本当にいろんな人たちを見た。それも同じ地球に生まれた仲間たち。このことがカンボジアで見た苦しんでいる人たちを助ける解決策にはならない。それでも何か、大切なことのように感じた。

私はこれから一人でも多くの人にカンボジアで見たことを伝える。日本の人に、若者に仲間の姿を知ってほしい。日のあたる明るい部分を。日のあたらぬ暗い部分を。あなたが見ている世界は全てではない。もっと知ってほしい。世界は広いのだから。仲間は六十七億人もいるのだから。

私をカンボジアに連れて行ってくれた KnK のみなさん、そしてカンボジア、オーブンチャラン。

2007年 夏休み友情のレポーター 大沼 文香